☆先進国・後進国・「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独―世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟

3月20日
週刊
第216号
編集発行人　鹿島　昴
一部　20円
購読料　20回500円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2―7―6濱沢ビル内電話代表
03(264)2961 振替 東京 23110
大阪支局大阪市都島区都島中通り3―7―16
電話 06(921)1457
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128―29(075)(701)0025
名古屋支局 501 (732)3553

26日　共産同関西政治集会
28日　共青同・社学同全国大会
29日　全国反帝戦線結成準備大会
4月3～5日　医学連全国合宿

3・29反帝戦線結成準備大会に全国総結集せよ

内戦＝世界革命戦争に向け恒常的武装闘争を担う反帝戦線を全国に

共産主義者同盟政治局

反戦・全共闘に結集し革命的左翼諸党派の下に67年10・8以来の大衆的武装闘争を闘い抜いた革命的青年諸君！

われわれ、共産主義者同盟、共産主義青年同盟、そして新たな質の共青への飛躍をめざした社会主義学生同盟は、諸君に、反帝戦線への結集を呼びかける。

われわれは、過渡期世界の階級闘争の現段階に対し、世界革命戦争＝内戦による世界プロ独樹立に向け恒常的武装闘争を開始しようとし、革命戦争を荷う組織へと自らを純化し、質的飛躍を勝ちとってきた。このわれわれの飛躍は当然にも、われわれと、反戦・全共闘の活動家とのかかわりを変化させ、ひいては67年10・8以来の階級闘争のなかで発展してきた反帝統一戦線の再編を日程にのぼせようとしている。

反戦・全共闘の活動には自らが形成して来た従来の反帝統一戦線の闘争が国家権力の壁につきあたり、それに屈服するのか、もしくは、それを突破すべき質へと飛躍するのかが問われている。反帝戦線は、こうした現下の階級情勢のなかで、国家権力に対する新たな質の闘い、内戦＝世界革命戦争をめざした恒常的武装闘争の一翼を荷う組織であり、反戦・全共闘の活動家は自らを反帝戦線へと組織することを通して、従来の反帝統一戦線の限界を突破することが出来るのである。

われわれは、まず、内戦を荷う反帝戦線、この新しい質をもった組織の存立の条件を明らかにすることからはじめ、同盟9回大会以降とりくまれた反帝戦線形成に向けての組織活動を総括し、そこから、反帝戦線の性格・結集点・任務、及び組織建設を明らかにしてゆきたい。

〈過渡期世界の階級闘争〉

ベトナム反戦闘争の一時代が終り、内戦＝世界革命戦争への前段階としての恒常的武装闘争の時代が訪ずれている。

ロシア革命以降延命に延命をかさねた帝国主義は、今日先進国プロレタリアートの組織的武装闘争の開始によって、ようやく革命情勢を迎えようとしている。

ロシア革命によってその端を切っておとされた世界革命戦争は、帝国主義心臓部においては圧殺され敗北したが、植民地・従属国においては、それ以降今日に到るまで、戦争が階級闘争の主要な形態であった。

だが、植民地・従属国における民族解放戦争は、ソ連共産党がスターリン主義へと変質するに及んで、帝国主義にとっては延命のための一つの条件へと転化した。とくに第二次大戦以降の民族解放戦争は、帝国主義にとっては、侵略・反革命戦争として闘われつつ、米帝の世界支配を完成させていったのであった。

過渡期世界の構造は、後進国を独立した、資本主義国として発展する道を封じ、後進国が、米帝の政治的、軍事的、経済的支配の枠組みにますます深く組み込まれてゆくなかで、民族解放闘争は質的転換をせまられ、反米、民族独立・社会主義の質をもった、大陸解放をめざした闘いへと成長し、単に民族解放のわくにとどまらず、大陸を解放する戦争の一環として自らを位置づけた大陸革命軍の形成が進んだ。

もとより、米帝以外の列強は第二次大戦によって疲弊し、民族解放闘争を抑圧しえず、ここに、米帝を軸とした、国際反革命同盟の成立の一つの根拠があったのであるが、（国際反革命同盟成立のもう一つの要因は、帝国主義列強内部の階級闘争の激化にあることはいうまでもない）米帝のもとに一旦は統合された後進国の革命戦争は、中国革命の勝利と、大陸革命軍の形成のなかで米帝に対する反撃を強化していったのであった。

一方帝国主義列強間の不均等な発展は、当初の米帝とその他列強との圧倒的な力量の差を接近させ、このことが米帝の当初の世界支配体制の維持を困難なものにしていった。（IMF下におけるドル危機、海外派兵の縮小、EEC・日本の地位の向上等）

ベトナム戦争は過渡期世界（帝国主義、後進国、「労働者国家」の並存する世界）における、帝国主義の傾向と、革命戦争の力量とを一つの転換点へと煮つめあげ、かくして、国際階級闘争は新しい時代を迎えるに到ったのである。

ベトナム革命戦争の勝利は、帝国主義の侵略・反革命戦争が、帝国主義国にとってももはや従来通りの政治的効果をもたらさず、むしろ、米帝の内部に深刻な階級闘争の激化をもたらすに到ったのであった。一方、ベトナム革命戦争は国境を越えて発展し、さらに東南アジアにとどまらず、三大陸の革命戦争に強化されてきている。

〈世界革命戦争に向けて〉

このような後進国における革命戦争の強化とともに、帝国主義列強内部の階級闘争も激化した。日本においては、東南アジア侵略、反革命に向けての帝国主義的社会再編が、進行している。それは、法体系、軍、警察、裁判所等の再編から大学、労働組合、農業等のあらゆる領域に及び、その結果、合法的大衆組織は、帝国主義のがんじがらめの支配下におかれ、反戦・全学連、全共闘等の半合法的大衆組織が形成され、国家権力との激突のなかで、階級闘争の質は武装闘争へと煮つまって来た。

こうした階級闘争の煮つまりを革命戦争へと導くことが革命党の課題に登っておりそのことは、革命党に、反政府闘争から政府打倒闘争、プロレタリア権力樹立の能力を要求し、革命の軍隊を組織する能力を要求する。

さらに、半合法的大衆組織（反戦・全共闘）に対しては、自らを革命戦争を荷う組織へと鍛えることが要求されている。

革命の軍隊、プロレタリア軍隊は、戦争による戦争の消滅をめざすものであるが、その組織原則は徴兵制と傭兵制によるブルジョア軍隊とは異なり、政治性と思想性による自発的原理に求めなければならない。

さらに、革命の軍隊の根拠地の存在と不可分であり（日本の場合は地域的にではなく、生産の一部分と地域の点のなかから根拠地を形成しなければならないであろう）この根拠地の統治の内容が問われ、共産主義がその基準にされねばならないであろう。

かくて共産主義の綱領と、世界革命戦争の軍事戦略を内包した路線の確立と、軍事を組織する組織の団結の内実が要求されているのである。

われわれは、昨年8月、9回大会において軍事組織の建設を原理的に解明し、安保決戦に向けて軍団建設に着手した。当初の提起においては、全共闘や反戦といった非合法的大衆組織の内部に、武装行動隊を組織し、その連合体として、安保決戦を闘う軍団を形成しようとした。

だが、街頭武装闘争は、国家権力の先行的な治安体制の強化によって、軍事的にも技術的にも高度な軍団が要求され、一方大衆武装の萌芽としての全共闘に対し、国家権力が、大学占拠を解体するなかで、全共闘武装行動隊そのものの根拠地が破壊され、そのことを通して、そもそも、軍団の建設路線そのものが問いかえされたのであった。

かくして、全共闘武装行動隊を党と、地域の点を根拠地とした軍団へ再編することが課題となり、反帝戦線の建設が提起されたのであった。当初の反帝戦線の位置づけは、地区を単位とした、労学を問わない全人民的軍団であったが組織建設の遅れから、実体としては、大衆的武装闘争を荷う活動家の総称であり、赤ヘル軍団総体の呼称であった。

だから、昨年十・十一月闘争はこのような質の反帝戦線によって闘われたのであり、したがって、十・十一月闘争の軍団の総括をするなかから、われわれは反帝戦線を、より強固な内実をもったものへと高めてゆかねばならないのである。

〈十・十一月闘争における軍団建設〉

十・十一月闘争における軍団建設の総括は、第一に、われわれが本格的武装闘争を準備するとき、不可欠なものが、軍事戦略でありそれは、従来の大衆的武装闘争の戦術の延長には存在しえないことであった。大衆闘争やデモンストレイションとちがい、軍事は勝つことが前提である。そして、戦闘の勝負は、敵と味方の力と陣形と意欲によって、計算しうる。軍事の観点よりみれば、十・十一月闘争の敗北は必至であった。一方大衆闘争の観点よりみれば、軍事的敗北は決戦場におけるものであることによって、政治的敗北につながっていた。

第二に、だから革命的左翼は、60年代の闘争パターン（反政府闘争）によってはもはや闘い抜けず政府打倒闘争に向けての革命党そのものの飛躍が問われたのでありそれゆえ、われわれは、革命党の飛躍がどのようになしとげられたかを明らかにせねばならないのである。

第三に、国家権力が全共闘の大学占拠を解体したことによって、大衆の武装が、地区における3人組・5人組の点を結合した根拠地へと追い込められるなかで、軍団としての日常展開の原型が、自然発生的に形成されていったことである。

第四に、それゆえ、反帝戦線の形成には、自然発生的条件がありそれを目的意識的な軍団へと再編するには、党の指導と政府打倒の革命路線の確立、それを前提とした軍事戦略の解明、さらに、軍団の組織形態、日常活動の内容等が明らかにされねばならない。

〈その性格と結集点〉

反帝戦線の基本的な路線、結集点は次の内容でなければならない。

❶帝国主義の侵略と反革命を世界革命戦争に転化すること。

❷全人民の武装、世界プロ独を樹立し、共産主義を組織すること

❸世界党、世界赤軍建設の一環を荷い、国際的党派闘争を貫徹すること。

❶はわれわれの目ざすものが人民の世界革命戦争へ組織することであり、そして、その要綱は、帝国主義の侵略、反革命にあることを明らかにしたものである。今日の階級闘争が世界革命戦争へと発展せざるをえない根拠は、すでに述べた過渡期世界の分析によって解明することが出来る。われわれは、この分析から、帝国主義の侵略・反革命が革命戦争の条件を形成していることを明らかにしうるし、侵略・反革命を粉砕する闘いのなかで、人民を革命戦争へ組織しなければならないのである。

次に問われるものが、世界革命戦争の内容である。それは帝国主義戦争とは異なり世界的規模であり内戦と、その内戦に対する革命の輸出と反革命の干渉等々の複雑な陣型をもつ。だから、今日確認しうるのは、世界革命の時代が、一九一七年にその端初をもつことと、革命戦争は持久戦であり防禦↓対峙↓反攻という発展段階をもつことが確認されればよい。そして、現局面は、防禦から対峙への移行の局面である。

❷は革命戦争で帝国主義を打倒することを通じ、人民をどのように組織するかということに対する基本的解答である。帝国主義を打倒し、帝国主義軍隊を解体するためには全人民の武装を実現しなければならないこと、そして、一国の政府を打倒することにとどまらず、世界プロ独を樹立し、スターリン主義、ブルジョア社会の残りかすと世界的な規模で闘争しなければならないこと、そしてさらに共産主義を組織しなければならない。

❸は、こうした世界革命の事業が、各国の党の連合体によってなしえるものではなく、単一の世界党を建設し、それに直結された世界赤軍の力によらなければならないことを示している。

そして、この世界党・世界赤軍を実現してゆくためには、われわれが国際的党派闘争を闘わねばならないことを意味している。

次に、これらの結集点からして反帝戦線は軍事組織として建設されねばならず、そのうちに軍団をはらまねばならない。

さらに、反帝戦線のメンバーは単に軍事に参加するのみならず、自らの所属する半合法的大衆組織や合法的大衆組織のなかで大衆を組織しなければならない。

反帝戦線は、このように、政治的展開と軍事的展開を結合した活動家の戦線である。

〈反帝戦線の任務〉

反帝戦線の基本的任務は次の内容である。

❶国際反革命同盟、NATO、安保粉砕、ベトナム革命勝利、ワルシャワ条約解体。

❷安保粉砕、日米反革命共同軍事行動粉砕、日米共同声明粉砕。

❸日帝の東南アジア侵略・反革命をめざした沖縄の前線基地化阻止。

❹侵略・反革命・抑圧の自民党政府打倒。

これらの内容に関しては、ここではこれ以上展開する必要はないであろう。これらの基本的な任務の達成に向けて、次に主要な環を明らかにせねばならない。

❶帝国主義軍隊、自衛隊を解体せよ。

❷日帝の侵略・反革命戦争に向けての軍事再編粉砕、第四次防阻止。

❸自衛隊内部に反戦兵士を組織せよ。

❹三里塚空港粉砕、沖縄をはじめとする軍事基地を撤去せよ。

❺独占の私兵、機動隊を粉砕せよ。

❻レットパージ粉砕、入管法粉砕。

❼交通・運輸・通信体系、住区大学、工場、農業等の帝国主義的社会再編粉砕。

われわれは、先にかかげた四本のスローガンは今日非常に一般的なスローガンになっており、それらのスローガンによってのみ大衆を組織することは出来ない。

後者のスローンンは、一部を除いては全人民的な闘争課題にはなっていない。だが、これらは、日帝の東南アジア侵略反革命にむけての具体的基礎に対する闘いの組織化であり、恒常的武装闘争の一環として、武装闘争を闘うことを通じ大衆闘争をつくりあげてゆかねばならないのである。

これらの課題を実現すべく、反帝戦線は、恒常的武装闘争の一翼を荷うと共に、半合法的、合法的大衆組織における大衆の組織化をおし進めねばならない。

〈反帝戦線の組織的基準〉

反帝戦線を以上のような戦線として建設しようとするとき問われるものは、その組織的基準であるすでに明らかにしたごとく、反帝戦線は軍事を荷う戦線として建設されねばならない。それは日常的な軍団として、共同生活を維持する組織ではないが、少くとも軍団としての訓練を受けねばならないしたがって、それは軍団編成を組織の単位としなければならない。

次に問われるのは戦闘が治安警察の介入を受ける以上、機密の保持に対する規律が必要である。これは単に、個人の力量の問題にとどまらず、反帝戦線の団結の質の形成としてとらえねばならない。

さらに、今日の軍事が、強固な政治的意志統一を前提とし、さらに、大衆組織における政治活動の強化をも不可避のものとしてある以上、政治討論は不可欠である。

したがって、反帝戦線は次の諸活動を展開しなければならない。

❶大衆武装の先頭に立つこと❷武装宣伝❸集会防衛❹敵対的武装の解除

以上の活動を展開するために、最低次のことが確認されねばならない❶定期的軍事訓練❷共同生活・共同労働❸治安法規に習熟し、逮捕されたときは完黙すること。

さらに、基本的な規律として❶時間の厳守❷指揮に従う❸学習の義務が確認されねばならない。

これらの組織基準は、具体的な実践活動のなかで、ねりあげ、一つの規範へとまとめあげられねばならない。

（Ⅵ）反帝戦線と諸組 織との区別

われわれがめざしている反帝戦線は、他党派の活動組織とどのような点で異なっているだろうか。

社・共は、党―青年同盟―労働組合（ないし労働組合的・社会主義的統一戦線）が基本構造である。共産党は地区組織を形成しているけれども、その内実は選挙対策、組合主義である。これらは現段階では軍事問題を提起していない。

一方革命的左翼は、各派党―青年同盟―反帝統一戦線（全共闘・反戦等の半合法的大衆組織）であった。その政治的内容は反政府闘争であった。

ところで昨年以来の武装闘争の激化のなかで、軍事をどのように位置づけるかが、革命的左翼のなかで決定的な問題として提起されてきた。この軍事の観点よりみるならば、中核派は、党―反戦・全共闘軍団―反戦、全共闘、という構造であり、ML派は、党―解放戦線軍団―反戦全共闘、であり、赤軍派は、党―赤軍―革命戦線である。これ以外の党派は軍事を真剣にとりあげていないし、その能力もない。

さて、われわれは、党―軍―統一戦線として、自らの路線を表現して来たが、これは先に述べた三派の路線とは全く異なるものであり、それゆえここで他党派の軍事組織との相異点についてはっきりさせることが必要である。

中核派は、革命戦争の路線を決定しておらず、したがって、ゼネストと街頭デモによる権力奪取になっており、それゆえ、軍団の質も、全共闘軍団・反戦軍団といった、大衆武装の延長に形成されるものであり、自衛武装の軍団である。

ML派は革命戦争をその路線としつつも、軍と統一戦線とに関する内容を明らかにしえず、その結果解放戦線軍団の実体は、反戦、全共闘の自衛武装の域を出ていない。

赤軍派は世界革命戦争を提起しながらも、それが、軍事戦略に導かれたもの ではなく「前段 階蜂起」が革命戦争であり、だから、この前段階蜂起をめざしているのが「赤軍」であり、前段階蜂起によって樹 立される のが「革命戦線」であるとしている。すなわち「赤軍」は蜂 起の軍隊 なのである。ところが、一斉蜂起を組織するのは、軍隊ではなく党である。赤軍派の混乱は、党の任務を軍の任務にすることによって、両者が混同されその結果、軍事主義的政治と、権力と闘えない、集会組織の軍隊へと陥落している のである。

われわれの提起する反帝戦線は日本における内戦＝世界革命戦争による世界プロ独の樹立にむけて恒常的武装闘争を荷う戦線であり党―軍―統一戦線の構造へと今日の反帝統一戦線を領導する主体である。

われわれが、党―軍―統一戦線というときそれは、今日存在している諸形態をどのように解釈するかという基準ではなく、革命戦争下の階級構造の形態を把握しているのである。すなわち、レーニンの労農同盟論が、ロシア革命以降コミンテルン第三回大会において統一戦線論としてまとめられ、そしてそれが、今日の革命的左翼の統一戦線論の基礎となっているのであるが、この総括が要求されるのである。

というのは、ロシア革命は、自然発生的蜂起―二重権力―党による蜂起―権力奪取―内戦という過程を経たのであるが、権力奪取が自衛武装の軍隊によってなしとげられたために、労農同盟内部での党派闘争は政治要求と戦術をめぐって行なわれた。この経験がコミンテルンにも持込まれ、コミンテルン一回大会のプロ独・ソビエト―権力樹立路線が敗北するなかで後退期の戦術として、コミンテルン三回大会の統一戦線が提起されたのであった。

したがってその内容は、大衆の改良的要求をも共産主義者が組織することにより、社民の下の大衆を共産党の下に結集しようというものであった。

だが、われわれが、革命戦争―自国政府打倒、世界プロ独として問題をたてるならば、革命戦争下の統一戦線は、単に政治要求一般によって形成しうるのではなく、むしろ革命の軍隊とどのように有機的に結合させるかが問題になるのである。

すなわち、三回大会の場合は合法的大衆組織を基盤に、革命派がどのようにして、改良派の下の大衆を獲得するかというかたちで問題がたてられているのに対して内戦下の統一戦線を考える場合は合法的大衆組織や半合法的大衆組織を非合法の解放区の質をもった組織へとどのように再編してしてゆくかが肝要なのである。

したがって、反帝戦線は、大衆の自衛武装を組織するのみならず独自の戦闘を通じ、大衆のなかにその戦闘を支持する人々の独自の組織網を形成してゆかねばならないのである。

以上が、革命的左翼内部の軍団組織に対する反帝戦線の相違点である。

〈反帝戦線と大衆組織〉

反帝戦線と全共闘・反戦との関係、また自治会労働組合との関係はいかなるものになるのであろうか。全共闘・反戦は党派間統一戦線組織としてあり、反帝戦線は、独自の観点から、これにかかわってゆく。

自治会・労働組合等に対しては直接かかわることなく党が組織する活動家組織を媒介にこれにかかわらねばならない。すなわち、合法的大衆組織に対しては、党の指導のもと、主流派活動家会議や、労研等を組織するわけであるが、反帝戦線は、それらの活動を荷いつつも、独自の観点からこれらの活動家組織を指導しなければならないのである。

（Ⅴ）反帝戦線建設路線

以上のような質をもった反帝戦線を結成してゆくためには、従来の活動家組織の名称がえや、またよせあつめによっては組織建設をなしとげることは出来ない。

それは反帝戦線結成準備会を上から呼びかけるとともに、同時に下から地区単位に、従来の活動家組織を再編し、下から新しい質をもった組織へと飛躍させせつつそれらを全国的に上から結合してゆくことが必要である。

三・二九反帝戦線結成準備大会は、上からの統合の試みであり、すでに進行しつつある地区における反帝戦線建設を集約し、点検し肉質性をあたえてゆくための大会である。

この結成準備大会を区切りに、全国各地区に、反帝戦線結成をおし進め、それら全体を集約したものを反帝戦線結成第一回大会として、組織しわれわれの新たな飛躍を勝ちとらねばならない。

全国の活動家諸君、三・二九大会に結集し、全国、各地区の反帝戦線結成にただちにとりかかれ！

反帝戦線結成準備大会

□日時　三月二十九日　午前十時
□場所　国立福祉会館
／基調報告／決意表明／連帯挨拶

社学同に初の分離欠席判決

一名に実刊二年、十二名に執行猶予

東大安田九・十九グループ

三月十九日　東京地裁刑事九部（柏井裁判長）は、安田九・十九グループに対して、二年の実刊を十九グループ岩野君（東大）含む分離欠席判決を下した。

午前九時、地裁前に結集した東北学院、茨城大、小樽商大の闘う七名の被告団と、五十名の赤ヘル部隊は、再三に渡る地裁権力による実力排除にもかかわらず、徹底的な判決粉砕闘争を闘いぬいた。

権力の 恫喝をはねのけて獲ち取られた地裁前集会において、被告団を代表して、茨城大および東北学院大の革命的学友によって、恒常的武装闘争への端緒を切り開いたものとしての東大闘争が持っていた質を、断乎維持し、それを荷いきった共産同―社学同の闘いの戦列を獄中においても貫徹し、敵権力打倒をめざして、不屈の意志をもって闘いぬく決意が述べられた。ついで、安田砦における不滅の戦いを指導しぬいた全学連書記次長から、七〇年代階級闘争における闘いの視点が述べられ始めた時、敵権力は、暴圧的な排除という弾圧をかけてきた。しかしわれわれは、再度態勢を整え「分離欠席裁判粉砕」「日帝打倒」のシュプレヒコールの下、地裁周囲のデモを断乎として獲ちとった。

開廷予定を三十分以上上回わる遅れの後、五〇〇公判廷は、分割審理を組織し、一切の事実審理ぬきに判決を下そうとする裁判権力の欺瞞主義に対する非妥協的な闘いが展開された。全被告は、着席命令を拒否し、階級裁判を断罪し傍聴席からは、発言禁止命令を断乎としてはねのけて「分離判決粉砕」のシュプレヒコールが繰返えされるという被告席傍聴席一体となっての闘いの前に、法の権威という幻想にしがみつく裁判長は、秩序維持の名の下に寛容の偽装をかなぐり捨て、全員退廷命令を出し、実力でもって被告団、傍聴者を退廷させた。同時に、そのような状況では正当な弁護活動が出来ないと、弁護団も退廷、法廷は裁判長と検事のみによって続行され欠席判決がなされた。

安田九グループ
社学同関係は以下の通りである。

中野　一秀	茨城大
瀧田　吉光	〃
小畑　和滋	東北学院大
菅野　光夫	〃
伊藤　貢	東北学院
堀江　幹男	〃
荒木　茂衛	小樽商大

全員一年八月執行猶予三年

3.5

卒闘に赤ヘル軍団突入！

八名不当逮捕さる

高安闘委農大一高支部

三月五日農大一高において、高安闘委を主力とする九名の全共闘の同志が学校当局のロックアウトを打破り、校内に突入したが、学校内にいた私服刑事、および機動隊員六〇名によってその場で八名の同志が逮捕され、つれさられてしまった。（うち、一人はからうじて弾圧からのがれた）

その日の学校側は校外に私服刑事五〇～六〇名を巡回させ、機動隊を一個中隊、パトカー等をはい置し、学内に私服刑事と伴に右翼高校生を二〇～四〇名待期させていた。その様な弾圧下で、高安闘委を主力とする赤ヘル部隊九名はバス停農大一高前から正門まで二〇〇Mをデモり学内に突入したが国家権力の全面的登場により同志八名が逮捕された。

現代社会の帝国主義的再編の一環として、資本の要請する 産業予備軍の 更なる 高度化として現在の教育というものが再編されている。そして高校においては、カリキュラム改変、商業、工業、普通高校、高専、理数科高校とより良い技術と労働力を獲得するために細分化された、資本の要請に応えるものとして教育がおかれている。

そのような高校という場に存在し、高校生は矛盾を感じている。以上のように高校教育が資本の運動法則に規定されて動いている中で、卒業式をただ単に「三年間は灰色だった」その総括を出そうとか、まったく現存の高校教育、そしてその予備、文部省通達、教育庁通達がどこから、何故に出てくるかという根本的な問題をぬきにして、闘争を組むのではなくして卒業式は一つには大学というより高度な産業予備軍の生産過程へと行くか、そのまま直接生産過程へと行くかの高校という場を卒業式を通じて視覚的に終らすこととして存在している以上それに対して我々は、現在のブルジョアジーそのものの打倒の質をもって農大一高において卒業式闘争を闘いぬいた。

まさしくそれは卒業式闘争を経済闘争次元で終らすのではなくして、一つの諸闘争を政治闘争へと高め、一つの革命闘争へと闘いぬき我々は、大衆の圧倒的支援の下に明確に高安闘委として登場し、全大衆に我々の提起した問題をつきつけ、より多くの大衆を結集する闘争へと高めて行った。

その後も学校当局はすぐ8日までロックアウト体制を敷き、我々の闘争を圧殺しようとしたが、我々は前面からそれと対決し、断乎学校側、国家権力と闘いぬき、今後の闘争を任うべく主体として自らを形づくり、農大一高に於いて膨大な大衆的決起をうながしている。

二面より

旨の 構造としての 地域労働組合（仮称）の構築を呼びかけるものである。これは従来の階級的労働運動、地域労働運動の内実に組織形態を与えるものである。従来の「評議会」の「ソビエト」との混乱をさける意味で、それは明確に「労働組合」としたのであり、それは当面、中小零細企業労働組合における公然たる組織的登場と、何よりも典型的闘争の展開と、産別における産別反戦の結集と階級的労働運動の推進、地域労組への二重加盟という形態でOO地域労組という形での組織形態が取られるであろう。それは明確に組合費を取め、自主的な労働者集団としての個人加盟の労働組合としての形態を持ち、日常的にはショップスチュアート的な活動を行ない日常的な「党―軍―統一戦線」の政治指導との媒介関係を持つものである。

最後に、党的立場からは、あくまでも「党―軍―統一戦線」の提起とその「恒常的武装闘争―内戦＝世界革命戦争」の推進が基本であること。階級的労働運動の構築はその推進の上に、そのすそ野として始めて意味があること。特に従来の第二戦線的な政治闘争に於ける反戦に対する平準の存在のように、革命的左翼に対する民同労働運動・労働組合自身が帝国主義運動に転化した段階で、革命的左翼自身が自からのすそ野・第二戦線をも独自な領域として持たざるを得ないということから来ていること を再度強調しておきたい。

増補版出来　二月二十七日発売　定価二〇〇円
労働運動の現段階とわれわれの任務
―反帝統一戦線と階級的労働運動―
(一)　労働運動の転換とは何か
(二)　東大闘争総括
(三)　反レ・パ闘争の階級的意義について
(四)　右派労働組合の性格と動向
(五)　4・28と階級的労働運動
(六)　諸党派の労働運動路線批判
反戦活働家必携の書
日本労働運動の総括のふまえ
ソビエト運動論の基礎理論を展開
共産主義者同盟パンフ

社学同理論機関誌
理論戦線
第九号　準備中

ぼるしぇびき通信
創刊号
回東大統一公判闘争―審貫徹方針
回獄中同志へのアピール
1部50円（月二回刊行）
共産主義青年同盟弾圧対策委員会

3・11日大全共闘葬

中村君虐殺を弾劾し日比谷に五千結集！

中村君虐殺弾劾日大全共闘葬
全共闘

日大全共闘は三月二日、一人の同志を失った。

三月十一日、寒い日であったが日比谷公会堂に日大生、労働者、高校生、大学生、各階層の人々が足早につめかけ、あふれる悲しみが会場をかけめぐっていった。

会場周辺は六時すぎ、五千の人々が弔旗をささげ、やがて関東医闘争中の本多広一君の司会により古田体制—国家権力に対する闘争の決意が、いまはなき中村君に捧げられていった。

真相究明委員会の日大弁護団、田賀秀一弁護士の虐殺の真相暴露に続き青医連の小島医師から、中村君の致命傷は、断面積の小さいもので強度に打たれたもので、決して階段等によるものではない事が医学的に明らかとされていった。

この後、日本全共闘の秋田明大議長が遺影にむかって弔辞を読みあげ遺族の拍手の中で中村君の御両親が壇上にたった。

父君は「期待していれた大学に息子を殺してもらった。ビラをまいただけで……」とあ、いきどおりを古田体制に対してあらわにされた。

八学部闘争委員の追悼の辞のあと日大闘争救援の会、べ平連、救援連絡センター、全国全共闘、全国反戦の各代表者たち、各政治組織からのあいさつがML同盟、共産同、革共同、統社同、共労党、社労同、第四インター、革労協の順に行われていった。

共産同からは佐々木和雄氏がたち、❶我々は旧い左翼のように暴力一般を問題にしているのではない。敵が暴力を用いた事を非難しているのではなく、その暴力の内実が反革命であること、このことを我々は追求する。我々はこの反革命暴力に対して、革命の暴力を対置する。中村君を虐殺した右翼古田、権力に対して我々は革命的暴力をもって復讐する。

❷そもそも10・8以来の日本階級闘争に復権されたものこそ、この革命的暴力であり、この暴力を帝国主義国、後進国、労働者国家全てを世界プロ独樹立にむけて前進せしめていくための、世界革命戦争の暴力、国際主義として復権せしめたのだ。

❸我々は昨秋、安保決戦でこの当初的意図を実現させえなかった。しかし、我々はこの挫折から更に後退へというのではなく広大な統一公判からの離脱派に見られる傾向を粉砕し日本階級闘争の切り拓いた地平を断固として堅持し、更に4・28へむけて武装戦闘体制を構築する。沖縄闘争の指針は「沖縄奪還」でもなければ「沖縄解放」でもなく「米軍基地撤去・自衛隊の侵略前線基地化阻止」であり、これこそ沖縄闘争勝利の内容である。

❹わが同盟は虐殺された中村君の遺志をうけとめ、古田体制打倒はもとより、安保沖縄闘争を通して、革命の事業を更に発展させていくための先端の部隊を今後とも担うものであることを明らかにして中村君への追悼の辞としたい。とのべ出席者の共感をよんだ。

この後、秋田君がふたたび日大闘争の勝利に向けて決起しようと呼びかけ、二名の死者、五千の検挙者、三千の負傷者を出し日大アウシュビッツの中に[illegible]されてから取り残されている日大学友の「中村君を再び殺しにするな！」とい自然発生性への方針が出されていった。

この日、社学同は地上にまであふれ出る三千の結集を日大闘争[illegible]を始めとして獲ち取った。

中核派は、おずおずと会場入口まで来てパンフレットを出したりしまったりしていたが神奈川県委員会・KTMの諸君に追求されるやべ平連「帝戦」よろしく逃亡してしまった。

この日も戦旗立ち売りは全紙売りつくして終った。

中村君の遺影に弔辞を捧げる秋田日大全共闘議長

共産同神奈川政治集会に九〇名

党派闘争—党内闘争の意義を確認

【神奈川分局】「全世界を単一の戦場とする国際的内戦—世界革命戦争へ奴隷の如き時代を切り拓け！」我々神奈川県委員会は以上の如き基調で2月26日、共産同政治集会を90名の戦闘的労働者学生を結集し成功的に闘いとった。

「昨10月県委員会再建以来、10〜11月の誇りに満ちた敗北の烽火の中をかいくぐり、その中に70年代のミネルヴァの梟の飛び立ちを見つめようとした我々は、この政治集会の中で70年代こそは「同一武装」をめぐる時代であり、階級闘争は革命戦争という形態をもってしか示されないこと、そして一切は「革命か反革命か」という二者択一的な選択以外にないことを明らかにし、11・16蒲田に於いて六千本の火炎ビン闘争の敗北に身をひたらせながら「次は何か？」と待ち望んでいる戦闘的、革命的大衆に「戦争への道」をさし示した。

世界的にラオス、ベトナム、カンボジアをめぐる大陸革命戦と世界革命戦争、そして、国内における沖縄全軍労の闘い、小西三曹の叛乱は、世界的な階級闘争の基本軸に、単一武装、革命戦争が現実的に差し切っていること、従ってそれ故自衛隊治安出動—日米共同声明—安保、沖縄と日米を結点とする国際反革命侵略軍事体系が敵の陣形として創出されていることを明らかにし、革命戦争をめぐって革命党と反革命党の国際的対峙状況が作り出され、それを帝国主義の心臓部へ向けて、反攻として組織されなければならないことが明らかにされている。

要求されているのは、党—軍—革命戦争統一戦線の構築であり、従来の革命戦略の全般に流るソヴエト運動論という地平が、実は一〇・八に到る大衆の自然発生性の中に増大にうみ出されていく新党派主義と現代経済主義に対する党派闘争、即ち自然発生性を解体し武装＝軍隊へと飛躍する党の位置に力点をおかず、むしろ逆に新党派主義の中に解体されていったという点をはっきりと止揚し切ることが、急務となっている。

われわれは、七〇年代は、こうした世界帝国主義に到る永続世界革命戦争の最後の質のつまりであり、それゆえ、現在は古い党から新たな党への党の革命が遂行されない限り、永続世界革命戦争の第二段階（全世界を単一の戦場とし、われわれの反帝が国際的内戦として帝国主義の心臓部へ向けて開始されるべき時代）へ突入することが出来ないのだ」

以上のような基調報告が同同志より報告され、熱気あふれる同志諸君の討議の下で確認され、われわれは次のようなスローガンを採択した。

❶党内論争—党内闘争＝党の革命に大胆に着手せよ！！
❷共産主義を目指す永続世界革命戦争を！！
❸帝国主義の反革命侵略戦争体系を解体し、世界革命戦争の陣型を創出せよ！！
❹ソビエト運動論を止揚し革命戦争統一戦線を構築せよ！！

共産同関西政治集会

□日　時　三月二十六日
□場　所　中之島公園
／基調報告　浅田隆治
／連帯挨拶　小西誠・三里塚反対同盟・軍全労他

共産主義者同盟

共産同政治集会に結集せよ

3月26日中之島公会堂で

【大阪支局】われわれは「反帝戦線結成！帝国主義軍隊解体！四月武装闘争貫徹！」のスローガンの下、三月二六日に、中之島公会堂において、共産同政治集会を開催すべく、全力を注いで準備を進めている。

昨秋安保闘争の敗北からいかなる教訓を導き出し、七〇年代闘争をいかに展望するかは革命的党派の死活を決するものである。

六七年10・8闘争は、まぎれもなく「組織された暴力と国際主義」の質に新たな階級闘争の始まりであり、その闘い以降の二年間の闘いが、その先いかなる方向を辿るのかを濃縮して問われたのが昨秋安保決戦であった。

この闘いを迎えうつ過程で、われわれは「党の革命」が根本的に問われ、赤軍派との党内—分派—党派闘争は、まさにこの「党の革命」をいかになしとげるのかをめぐって不可避に到来したものであった。

「軍事をはらむ党」へと、これまでの党を革命し、それによって反帝統一戦線を再編することは、七〇年代階級闘争が、内戦＝世界革命戦争としてあるが故に、これに勝ち抜く展望をうちたてる根本的な保証である。

今、われわれは、内戦＝世界革命戦争を勝利的に闘い抜く党—軍—統一戦線の立体的構造の解明をなしとげ、それへ向けて主体の諸組織をいかに再編していくのかとして、党の革命の第二段階を迎えているし、再度の赤軍派との武装党派闘争はそれを促す梃子であった。全関西の労働者・学生・市民諸君！政治集会に結集し、われわれと共に進もうではないか。

全国青年労働者討論集会をふりかえって

党—軍の先行的組織建設を通して階級的労働運動の拡大を展望せよ

共産主義者同盟中央労対部

＜はじめに＞

2・28—3・1全国青年労働者討論集会は、69年10—11月闘争という、我が反戦派労働者にとっての歴史的な試練を経た、最初の全国的討論の場であった。時は、あたかも、10—11月闘争の切り開いた地平の上にブルジョアジーの結集した反革命が反戦派労働者のレッドパージを軸として襲いかかり、反戦派労働者の歴史的真価が全体として問われ始めている時であり、70年春闘を前にして、総評（伝統的な日本型社民の運動）の解体と帝国主義的労働運動の大右翼連合が登場しつつある時であり、日米共同声明の実態化が日米軍事網の再編として押し進められ、三里塚決戦が日程に登り、沖縄全軍労のもうれつな闘いが展開されている時である。反戦派労働者にとって「春闘・沖縄・安保」という個別課題に対する具体的方針がこの集会に問われていたというよりは、むしろ、10—11月安保決戦という70年代階級闘争の第一歩をしるした前人未踏の闘いの経験を主体的に総括し、反戦派労働者が到達している地平の上に、70年代階級闘争の全構造を措定し、その中に於ける反戦派労働者の位置と任務を明らかにすることであった。

われわれは、2・28—3・1全国討論集会に於て、この課題をどの様に深め得たであろうか。残念ながら、2・28—3・1全国討論集会は、全体としては、終始やじと怒号の中で有効な討論が組織され、10—11月闘争で踏み出した巨大な一歩を全体として踏みかため70年代階級闘争を主体的に担う反戦派労働者の現在的課題を共通なものとして充分に深め得たとは云い難い。確かにそれは、反戦派労働者の相対的多数派である中核派のグロテスクな党派的引きまわしによる所が大きかったとは云え我が同盟をはじめとする日本の革命的左翼の主体的力量の現実を示すものであり、何よりも我が同盟の主体的総括を要求していることを全国の同盟員諸君、戦旗読者諸君と共に確認したい所である。なぜなら、われわれは、反戦青年委員会運動にとって、今ほど革命的党派の責任ある指導が問われている時はないと考えており、党派の指導が、「引きまわし」として運動に解体をもたらすのは、その党派の内容によると考えるからである。

本集会が、全産別分科会にわたって中核派の党派的引きまわしとして現象したのは、決っして偶然ではない。彼等中核派の党派性の内容そのものの限界が露呈しているに過ぎないのだ。彼等は第一に69年10—11月闘争で反戦派労働者が、そして日本の革命的左翼がつきあたった壁＝70年代階級闘争を切り開くわれわれの主体的飛躍に対して無自覚であり、または、その問題を回避しているのである。すなわち、戦後の「平和と民主々義」＝市民的政治闘争」の枠とそのワクを「暴力革命の復権」「組織された暴力と国際主義」でもって切り開いて来た67年10・8闘争以降2年間の「全学連・地区反戦青年委員会」の自然発生的高揚の延長線上に70年代階級闘争を措定し、労働者の左傾化をもって権力との対決を「勝利か敗北」に求める急進市民主義者集団としての彼等は67年10・8闘争以降2年間の自然発生的高揚が68年10・21〜69年4・28闘争以降ゆきづまり、今や全べての反戦派労働者と日本の革命的左翼に新らたな質的飛躍を要請したことに全く応え得なかったことに起因している。

第二に、彼等は、「反戦派労働運動」→「帝国主義を打倒する労働運動」という路線にも現らわされているように労働運動に対する路線を持っていない。その結果、全べての産別でその産別の特殊性には関係なく「11月決戦は勝利した」「白ヘル反戦部隊は闘った」「春闘バリスト」「6月ゼネスト」という無内容なお題目を押しつけることに狂奔したのである。全国反戦が大衆的な政治闘争機関として、70年代階級闘争のその権力闘争としての主体的担い手であり、あくまでも、革命党（世界党）と党を領導とする軍事組織（世界赤軍）及びそれに指導された戦略階級反帝戦線によってケン引された地区反戦を母体とする組織であるのに対して、その一翼としての産別反戦は、あくまでも、階級的労働運動の担い手であり、その補助的役割を担うものである。街頭実力闘争に対して「街頭主義ナンセンス」を対置する日共や民同や構改諸派やともすれば青解派のように、極めて右翼的に組合内左派としての産別青年部、産別反戦を対置するやり方と同様、産別青年部や産別反戦に無媒介的に革命の事業そのものを担なわせるやり方も又、メダルの裏表の誤りである。

反戦派労働者は反帝戦線に結集し内戦＝世界革命戦争の先頭に立て

我々は、69年4・28闘争の主体的総括の上に立って、右翼的傾向としての「工場内階級形成論＝ゼネスト待望論・反戦派労働組合」と闘いながら、しかも組合内左派としての立場を総括しつつ、10・8闘争以降の街頭武装権力闘争の質を普遍化するプロレタリアートの第一次団結組織を構造的に生み出し拡大させる「中央権力闘争—マッセンスト」を提起した。そして我々は、前人未踏のその闘いを身を持って経験したのである。

この10—11月闘争に於ける我々の実践的経験は、70年代階級闘争にとって、かけがえのない教訓を与えている。生々しい階級闘争の最前線で鍛えられたこの闘いは60年代階級闘争にどっぷりとつかり、日本的組合主義の左翼バネ的存在になれ切った多くの諸君には理解しがたい闘いであった。なぜなら、現代過渡期世界に於ける現代革命の型と構造を大衆が全人民が武装を決意し準備していない段階で、戦略的闘いとして、唯一プロレタリアートの普遍的存在に依拠して提起したからである。又、一方で「大衆の武装」を夢想する諸君には「一大ショック」として即ち、前人未踏の「党が軍事を組織する」という立場を「党内闘争・党の革命」を前面におし出して「決意したとかしなかったとかいう小ブル的団結」ではなく、戦略によって革命の未来から措定された「共産主義的団結」を現実の武装闘争の中で問うたことにより、「戦略論争が一時的論争ではなく革命の綱領と戦略・戦術」を実現する労働者の実践的任務として問われたからである。

われわれは「権力闘争の質を一歩もおとさず」前進力にいどんだのであり、恒常的武装闘争—内戦＝世界革命戦争の70年代階級闘争にその主体的第一歩を踏み出したのである。

今、中電マッセンストに対して様々なヒボウ中傷が行なわれ「マッセンスト」や「ソビエト運動」の右翼的にわい曲された言葉がはん乱している。前者は、主に中核派の諸君やML派の諸君から「生産点主義であり職場主義である」という批判である。だが、これは中電マッセンストの全くのワイ少化であり、われわれが「中央権力闘争—マッセンスト＝武装権力闘争」として提起し、闘い抜いた事実の提起した「マッセンスト」（ローザが提起した下からのマッセンストではなく、戦略的マッセンストとして、現代過渡期世界における目的意識的計画された戦術としての）の真の革命的意義を少しも理解しようとせず（中核派は革命党派ではなく大衆そのものであり、しかも先進的大衆の現にある意識を党派性にしているのであるから無理もないが）「五人で孤立した闘いで何がマッセンストか（事実は五人の闘いではなく、全国の階級闘争の構造を形成する膨大な大衆の闘い）」などという右翼的なヒボウ中傷を行なっているのだ。

後者は主に構改系諸派の諸君達4インターの諸君、青解の諸君の中に見られる「ソク流ソビエト論」である。この点では、中核派の諸君がいうように「権力問題抜きのソビエト論」であり、我々とは断じて無縁である。ロシヤにおけるソビエトが「自由と平和とパン」をかかげて下から自然生長的に作られ、ボルシェビキがそれに対して、目的意識的に武装蜂起を呼びかけ、赤軍＝革命の軍隊の権力闘争を通じて、プロレタリアートの権力になり得たように、ソビエトはプロレタリアの武装した権力であり、権力を打倒する革命の軍隊こそが必要なのである。しかし、現代過渡期世界における現代革命において、プロレタリア権力としてのソビエトは、決して自然生長的に出来て来るものではあり得ない。レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」というテーゼそのものが、現代過渡期世界において古くなっている。世界党—世界赤軍として、それは、平時から目的意識的に組織されねばならないのだ。我々はそれを、ドイツ革命におけるローザの敗北、ナチスの勝利の教訓から学び取らねばならない（前段階決戦）。その意味で、中核派のいう「ソビエトを作る運動など存在しない」という我々に対する批判は、現代革命に対する彼等の無自覚の証左を示すものに外ならない。

以上の論点に立って、そして我々の闘争の実践的教訓の上に立って、我々は平時におけるソビエト運動を武装ソビエト運動として主張しているのであり、それの前提条件としてそれを準備する「党—軍—統一戦線」の構築を組織路線としているのである。

全べての反戦派労働者諸君！一切の右翼的ワイ曲を廃して、大衆的な地区反戦を組織し、自からを反帝戦線にまで高め、恒常的武装闘争を担い、自から世界革命戦争の主体たらしめようではないか！

総評解体に抗して、階級的労働運動を構築せよ！地域労働組合（仮称）を組織し党・軍の裾野拡大を

67年10・8闘争は「平和と民主主義」「市民的政治闘争」から「組織された暴力と国際主義」へと、日本階級闘争の構造を決定的にかえるものであり、69年10—11月闘争は、その発展の上に、70年代階級闘争の構造を、「恒常的武装闘争—内戦＝世界革命戦争」へとその決定的な質的飛躍を問うている。

この政治闘争に於ける質的飛躍は、階級闘争における全分野にわたる構造変化を内包している。労働運動とその組織である労働組合にかても、70年代階級闘争の構造が問われているのである。

戦後の革命的激動の時代に日本の労働組合は「工場ソビエト」とでもいうべき「従業員組織」として組織された。これはヨーロッパにおける労働組合が「職種別・職能別に自然的なギルド的組織」として作られたのと、対照的である。この日本の「従業員組織」としての労働組合は、戦後の激動期には「工場ソビエト」的な、極めて革命的な役割をになったのであるが、日本資本主義の戦後の復活過程は、この特殊日本型労働運動を一つ一つ骨抜きにしていった。

50年代を通じて、ほぼ民間大企業の設備投資合理化が一巡する過程で、民間大企業労働組合はほぼ全面的に「合理化対策委員会、苦情処理委員会」的な「経営協議会」へと変えられ、60年代に入り日本資本主義の帝国主義的飛躍の段階に突入するや、むしろ積極的に「企業の発展のために合理化を推進し、国際競争に打ち勝つために帝国主義再編に協力する」といった形での思想別組合の傾向をも含む、帝国主義的労働運動へと転化していったのである。

50年代を通じて、最も合理化がおくれた第三次産業（運輸通信交通公的部門）を中心とする官公労働組合は、50年代では比較的この「経営協議会化」の過程がおくれ、総評民同運動の大黒柱の存在を担って来たのであるが、60年代後半日本帝国主義の飛躍となりつつあるこの官公労に対する帝国主義的再編合理化政策がかけられ、この過程で一きに「経営協議会化」と「帝国主義的労働組合」化の再編が、手をかえ品をかえ、アメとムチの政策をおりまぜながら、同時に急速に押し進められつつあるのだ。

民間中小企業労働組合は膨大な下請の未組織労働者は別として、最っとも自由な「労働組合」の生きている所である。

現在、民間大企業労働組合を先頭として、思想別大右翼帝国主義的労働組合のナショナルセンターの構想が総評・新産別・同盟・JCというワクを越えて進められようとしていてる。将来的には、創価学会系労組・社共系労組・大右翼労組（帝国主義労組）われわれを含む反帝労組といったワク組みになるであろうという予断は決っして「お話し」として片づけられない状況にあるのだ。

民同労働運動は、経済運動として、日本的社民の運動として、又は、日本的組合主義として、経済主義、組合主義の日本的形態であった。経済闘争における春闘方式（合理化に一定限協力するかわりに高度成長のおこぼれを賃上げという形で受け取る）設備投資合理化の過程での職場闘争（労働条件向上）反動化に対する「平和と民主々義」という市民的政治闘争、という三つの形態が、その要であった。伝統的な日本の左翼もまたこの日本的組合主義の左翼バネとしての役割を担い、民同を左から補完したのであった。

60年安保闘争以降、新左翼労働運動の典型となった長船社研・電通労研をはじめとする労研・社研運動もまた、その政治主張にはかかわりなく、構造的には、この日本的組合主義の左翼バネとしての域を出るものではなく、日共長船細胞や日共中電細胞の職場闘争を最っとも原則的に受けつぎ、エリコン拒否闘争や、安保闘争における街頭闘争等の、伝統的闘争をもっとも原則的に受けついだに過ぎなかったのであった。

67年10・8闘争以降の全学連と反戦青年委員会の「組織された暴力と国際主義」闘争は労研社研や長船社研が7年間かかってどうしても乗り越えることが出来なかった組合主義的政治の枠をわずか数ケ月の実践的経験によって乗り越えることを可能にしたのだ。

それは何よりも、地区反戦運動の展開による革命的な政治闘争の大胆な実践形態が与えられた点にある。この地区反戦運動・街頭実力闘争という形態での革命的政治闘争と組織的に結合することによって始めて産別労研・産別反戦もまた、階級的な運動としての質を与えられたのである。

67年10・8以降のの反戦青年委員会運動の登場の意味は、第一に従来の「平和と民主主義」「市民的政治闘争、議会主義的政治闘争」にかわって「反帝実力闘争、組織された暴力と国際主義」を公然と登場させたという、その政治闘争の質にあり、第二に、従来の「従業員組織としての労働組合」にかわって「契約者集団としての労働組合」を登場させた点にある。

69年末の総選挙は64年以降そのすうせいにあった。社会党のチョウ落を決定的なものとし、60年以降総評の解体と帝国主義的労働運動への再編は急速に進行している。70年代階級闘争にとって、もはや従来の「戦闘的労働組合総評」のおもかげはなくなりつつあるのであり、政治闘争にかて、反戦青年委員会・全学連のすそ野を形成しているべ平連のように、従来の革命的左翼のすそ野を形成して来た、労働組合そのものが、帝国主義支配体制の積極的担い手として労働者の敵対物に転化しつつあるのである。

労働組合とは、労働者の即目的要求を実現するための労働者の即自的要求獲得組織である。ヨーロッパの労働組合がそうであったように、労働者の自発的な契約的集団として歴史的に形成されて来たものであり、日本の場合はその特殊日本的な形態であった。組織としての労働組合は、帝国主義段階にあっては不断に帝国主義権力の労働対策の体現者としての性格を帯びざるを得ない。これは「労働組合法」成立の歴史を見ても明らかなように、資本社会における、労働組合の普遍的性格である。しかし、労働組合の「打ちこわし運動」以来の（「労働組合法」の成立の過程もふくめて）歴史を見ても明らかなように、自発的な労働者の契約者集団としての組織の内実としての労働組合は、その形式的形態の中よりも、その推進力となるべき運動者集団の中にある。

日本の労働運動は、反戦青年委員会という運動家集団を大衆に生み出す事によってその展開形態を与えられた。ヨーロッパにおいては形態としての労働組合が帝国主義の労働政策の体現者として即自的なプロレタリアートの敵対物に転化した段階で、共産党左派を中心としたショップスチュアート運動（世話役活動）が必然的に提起され、今なお、自然発生的な山猫ストの決起を形成しているのである。このヨーロッパにおけるショップスチュアート運動から山猫ストに至る一連の運動もまた、その政治指導の欠陥によって、体制の中にしっかりと組み込まれつつあるのが現状である。われわれは、日本における反戦派を軸とした階級的労働運動の新らしい波が、このヨーロッパにおけるショップスチュアート的な（労働者の即自的な日常要求の解決）性格を持ちつつ革命党の不断の組織的かかわりの中で、それは武装ソビエト運動のすそ野を形成し得るであろう。

我々は、従来から「総評の解体に抗し、階級的労働運動を構築せよ」と主張し、反レパ闘争を闘う過程で、地区労働運動や、地区共闘運動や階級的労働運動の内容として形成して来た。そして、その一定の組織論的展望として「労働者評議会運動」なるものを提起して来た。それは中電マッセンストの一つのスローガンにもなっていた。

だが「労働者評議会」たるものは、ともすればソビエト運動＝プロレタリアートの権力たる「ソビエト」としばしば混同されて来た我々のかつての同志であった旧中電労研の前田氏と我々との論争の一つにはその点にも存在していた即ち、ソビエト運動たるものは既に述べた如く、中央権力闘争—マッセンストとして、党—軍—統一戦線の何よりも目的意識的な闘争の推進のうちに形成されるということ、前田氏のいう労評運動とは我々のいう階級的労働運動の領域に属すること、これである。第二に、我々は、前田氏に対して、何よりも「党—軍—統一戦線」という党的立場の欠除していること、彼のいう「労評運動」が全べてであるという点の抜き方たい組合主義を批判したのであった。第三にその組織形成を、中核派鍋山氏や長船西村氏や旧中電労研前田氏の如きボスの話し合いの中から作り出そうとする点を我々は批判し、何よりも運動の実態を作り出す中から、下から作り上げることを主張したのである。

ともあれ、現在、彼等を中心に「総評にかわる反戦派による新らしい労働運動指導部労働者評議会運動」なるものがうわされている

我々は、70年代の「恒常的武装闘争—内戦—世界革命戦争を担う「党—軍—統一戦線」の武装ソビエト運動の裾野を広げる所の、独

—一面に続く

共産主義者同盟理論誌
共産主義
13号　殘部僅少（文献堂のみ）

共産同パンフ
革命の軍隊・党の革命
—10・11月闘争の運動・組織論的総括のために—
＜序　章＞
1　安保決戦で切り拓く階級闘争の質
2　安保決戦をめぐる階級情勢
3　安保決戦と党の革命
4　10・21闘争総括
5　十一月闘争と同盟の任務
6　当面する「軍事」の政治的質
7　七〇年代を担いきる革命党
8　十一月闘争とわれわれの軍事戦略
＜おわりに＞
—十一月闘争の総括にかえて—
主内容
■九回大会の意義と限界■第二回国際反帝会議総括■階級的労働運動論の整理■山代論文の評価（全共闘運動の現段階について）■革命戦争論■ソビエト運動論の整理■パルチザン、赤軍派、中核派の批判
B5版
二五〇円（〒五〇円）